

『宇治拾遺物語』の文脈

——序文をも視野に入れて——

今 村 みゑ子

はじめに

一見雑纂と見えた『宇治拾遺物語』の説話編纂形態について、それが何らかの「連想の糸」によって配列されているということが言われてすでに久しい。それは、『宇治拾遺物語』の各説話が、連続する説話間の絡み合う事物や言語における連想性（それが当話外の関連性である場合も含めて）⁽¹⁾によって、その内包する意味を広げ、多角的な読みの可能性を開示するものであることを明かすことになった。加えて、近年、荒木浩氏によって、「連想の糸」は連続する説話間においてのみならず、数話隔てて、あるいは遠く離れた説話間においても、互いを想起させる方法としてとられており、それが作品全体を貫いて、作品としての統一的世界を形成している、との指摘がなされるに至った。⁽²⁾氏は次のように述べている。

「連想」とは、単に連続する説話間の「糸」を辿ることにとどまらず、いわば連想する行為が、物語中既に記された説話を想起させ、それをイメージすること、もしくは振り返ることが、眼前に読み進めている説話の読みを刺激し、動揺させて、より拡がった説話世界を形成する、という一連の営為こそ「連想」であり、さらにその営為

は、『宇治拾遺物語』全体を一つの物語世界として認識する視界を読者に提供するのではないか、⁽³⁾

本稿では、遠く離れた説話間において互いに想起させる仕組みがどのように機能しているか、またそれを方法とすることで、『宇治拾遺物語』という作品がいかなるものとして成立しているか、そのことを具体的に見ていこうと思う。また同時に、その読みによってもう一つ、編者と別人説もある序文の筆者について、序文と説話本文との脈絡を読むという試みによって、編者と序文の筆者が同一人物である蓋然性についても考えようと思う。

一

筆者は以前、隣り合った二話——六話と七話、一五話と一六話——に注目して、俗なる世界と聖なる世界を二話一対とすることで、編者は両者に等価性を与えているという読みを考えたことがある。⁽⁴⁾その時、対を組み変えて、離れて存在する六話と一五話、七話と一六話という組合せにおいて眺めることによって、俗なる世界に付随する表現性と、聖なる世界に付随する表現性には、それぞれ互いに響き合う仕組みがあることに気付いた。

その例で言えば、六話は巧みに隠していた法師の一物が露見し、一五話は盗み隠していた「鮭」を暴露されて、「鮭」を「裂け(女陰)」に見たてる、いわば陰部露見という共通性があること、さらに六話の法師の事実を立証する表現「くは、これを御覧ぜよ」が、一五話の人夫の潔白を立証する「くわ、見給へ」に、六話の法師の「さま悪しく候」という抗いは、一五話の大童子の「さまあしとよ」という抗いに響き合うこと、そして結末が六話の「そこらつどひたる物どももろ声に笑ふ」、一五話の「そこら立ちどまりて見ける物ども、一度に『はつ』と笑ひけるとか」との等質の笑いに集約されていることなどから、両話の猥雑にして磊落な世界の類似性は、いくつもの響き合う表現に拠っていることを認めることになった。一方、七話と一六話では、七話の、殺生を止めようとした聖の真意を知った男の「ふしまろび、泣きて」という描写が、一六話の地藏の顕現を見た尼の「ふしまろびて、拝み入て、…涙を流して、拝み入

参らせて」との描写に響き合い、「ふしまろぶ」や「涙」といった共通表現が、真に尊いものを前にした時の感動の極致として用いられていた。それを通じて、七話の男の「悪」の中に、一六話の尼の「愚」の中に、聖性が本在しているという、聖なるものに対する編者の目が奈辺にあるか見て取ることができるよう思えたのである。

なお一六話の、童の顔が裂けて地蔵の顔が出現する奇跡的な出来事については、遠く離れた一〇七話の、宝志和尚の顔の中から観音の顔が出現する話が想起されることを述べた。その時には触れなかったが、聖なるものの奇瑞として類縁性を有する一六話と一〇七話には、類似表現を用いることによって互いを想起させる意図が、編者にあったのではないかと思われる点について、ここに少し触れよう。

一六話における、地蔵の顕現は、

すはへして、手すさみのように、額をかけば、額より顔の上までさけぬ。さけたる中より、えもいはずめでたき地蔵の御顔、見え給。

というものである。一方、一〇七話の宝志和尚の話には、

聖の御顔を見れば、大指の爪にて、額の皮をさし切りて、皮を左右に引きのけてあるより、金色の菩薩の顔さし出たり。

とある。菩薩の顕現は両者とも「額」から現れる。一六話には同話はない。一方、一〇七話の原話は『仏祖歴代通載』に求められ、該当部分は「既而以指釐面門分披」とある。また同話が「高山寺藏宝志和尚伝」に載り、その部分は「和尚即以右大指之爪從眉間、至頤裂開令見仏師」とある。これらからは直接「額」という表現は導き出されない。『打聞集』に載る同話のその部分は『宇治拾遺物語』とほぼ同文であるが、『打聞集』と『宇治拾遺物語』の影響関係や先後関係は不明である。これらを勘案するに、もともと説話に付随した表現であったか否かではなく、『宇治拾遺物語』においては「顔」「額」という共通表現によって、一六話と一〇七話とは互いに類似性を喚起することではなくてはならな

かった、と言えるように思うのである。

荒木氏の言うところにより、またささやかながら私見の気付いたところにより、『宇治拾遺物語』の語りの表現方法へのアプローチとして、遠く離れた説話同士に着目することもさらに進められてよいように思う。すでにいくつかの説話間の読みが荒木氏によって取り上げられているが、本稿では三九話と一五五・一五六話の「虎」、また序文と三七話の「菰」、さらに序文と三七話の関係から、一話と三五話、二七話と一三三話の、父(母)と子の説話などをめぐって、互いに想起させる仕組みとその意味を考えてみようと思う。

二

三九話は「虎ノ鰐取タル事」という題である。筑紫の商人が新羅(朝鮮半島)に交易に渡った帰途、半島の海浜で遭遇した出来事である。水を汲もうと舟を停泊させたところ、岸の岩上で狙っている虎が水に写る。飛びかかると同時に舟を出して危うく難を逃れ、海に落ちた虎に目を離さずにいると、上がってきた虎は左の前足を膝から食い切られていた。鰐(鮫のこと)に食いちぎられたのである。虎は血を海水に浸して鰐をおびき寄せると、今度は鰐の頭に爪をたてて陸に投げ上げ、下顎に食いついて振り回し、ぐったりしたところを肩に懸けて、切り立った岩を走るように登っていった。舟から一部始終を見ていた商人たちは半ば失神状態に陥った。

この話には同話が、『今昔物語集』巻二九第三一として載る。両者は同文性が高く、共通の原話があったようであるが、にも関わらず『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』では、その主眼が異なっている。『今昔物語集』ではこの話題の後に、無事に帰国した商人たちが妻子との再会を喜ぶという話題が続く、また話末に「此レヲ思フニ、余リノ事ハ可止シ。只吉キ程ニテ可有キ也」という『今昔物語集』特有の教訓が付けられる。虎と鰐の対決から導き出されたそれは、何事もほどほどに、という教訓である。『今昔物語集』にあつて『宇治拾遺物語』にない部分を比較すれば、『宇

『拾遺物語』が教訓などとは無縁であり、いかに虎の猛威、虎と鰐の死闘に焦点を絞って語っているかが明らかである。日本には生息しない、したがって日本人が見たこともない、虎という動物の凄まじさや驚異的な出来事を、体験者である商人たちの語りという、信憑性を保証しつつ語ること、そのこと自体がこの話の眼目だったわけであり、読者もひとえにそこに強烈な印象を止どめることになるはずである。

さてこの「虎」は、百余話隔てて、一五五話に再び登場する。しかもこれも「新羅」の虎であり、読者は三九話の、あの虎、の恐ろしさを想起するに違いない。一五五話は次のような話である。

壱岐守宗行の郎等は、ささいなことから主人に殺されそうになった。そこで新羅に渡って身を隠していたが、新羅では虎害騒動が起きていた。郎等は「兵の道」において日本が優れることを述べ、虎退治を引き受けることになる。命を省みない覚悟、冷静な判断、そして適切な武具の使用によって見事虎を退治し、日本人の面目を施し、新羅の人から賞賛を博し、褒美をもらって帰国する。

この話は日本人が「兵の道」の優秀さによって虎に勝つ話である。この場合、三九話をすでに知っている読者にとつては、あの虎を退治したということで、日本人の武勇をより強く意識することになるだろう。しかも、そうした三九話を想起させる仕組みが、同じ表現の繰り返しによって意図されているのではないかと思われる節がある。

まず虎の描写に共通性があることによって三九話の虎が想起されるであろう部分を挙げよう。虎が獲物を狙う描写として、一五五話に「猫の鼠をうかがふやうにひれ伏して」や「ついひらがりて、猫の鼠をうかがふやうにてあるを」とあるのは、三九話の「つづまりゐて物をうかがふ」、および、「ひらがりおるに」に通い、また、獲物に飛びかかる描写は、一五五話に「をどりて男の上にかかるを」とあるのが、三九話に「をどりおりて」や「をどりかかりて」とある描写に重なる。さらに、獲物を持ち去る描写として、一五五話に「肩にうちかけて去るなり」とあるのは、三九話の「なへなへとなして、肩にうちかけて」に重なる。

また、こうした虎に関する共通描写以上に意味をなすのは、三九話の虎が鰐を殺す描写が、一五五話では人が虎を殺す描写に代わっていることである。一五五話で郎等が虎を退治する様は、「おとがひの下より、うなじに七八寸ばかり、尖り矢を射出しつ」というものであるが、それは、三九話の虎が鰐の「おとがひの下ををどりかかりて、食て」とある、急所としての「おとがひの下」を想起させることになる。また、あがく虎は、一五五話では、「さかさまに伏してたほれてあがくを」と描写され、三九話での鰐の「のけざまになりてふためく」（「ふためく」は『宇治拾遺物語』では魚類や鳥類に関して用いられており、虎には「あがく」という描写が相当するという相違はある）に通じる。すなわち、一一五話では、三九話の虎が人に、鰐が虎に代わることで、鰐へ虎へ人という漸層が成立し、虎に勝つ人の強さを効果的に表現していると読める。

そして両話は最後に、相手に勝つことの不可能さを、一五五話では、「日本人、十人ばかり、馬にておしむかひて射ば、虎なにわざをかせん」と記すのに対して、三九話では、虎の猛威に対し、「舟に飛かかりたらましかば、いみじき劔刀を抜きてあふとも、かばかり力強く、はやからんには、なにわざをすべきぞ」と記す。一五五話では三九話の虎と人の力関係が逆転しているのである。

以上、一五五話になると、三九話の新羅の虎がまず描写において想起され、しかも次に虎が三九話の劣位の鰐に、人が三九話の優位の虎に代わり、さらに三九話の人と虎の関係が逆転するという表現性を取る。つまりここで、三九話の虎の猛威が想起され、それを退治する日本人の「兵の道」の優秀さが効果的に強烈に印象付けられる仕組みになっている。さらに言えば、三九話のあの虎も実は倒せない虎ではなかった、というわけで、はるか読み進めたのちに、いわば三九話を読み直すことにもなる仕組みである。

次に一五六話を見よう。今度は新羅ではなく「唐」の虎の話である。遣唐使が、子を食い殺した虎を退治し、唐においても「日本の国には、兵のかたならびなき国なり」と賞賛されたという話で、前話の朝鮮半島と、こちらの中国

大陸と、いずれにおいても日本の「兵の道」の優秀さが評判になったという、二話一対をなす話である。

さてこの一五六話における虎の生態、「かいかがりてゐたるを」は、前話の「ひれふして」や「ついひらがりて」に共通性を有するのみならず、三九話の、「つくまりゐて」や「ひらがりてる」をも想起させる表現である。また、一五六話に虎を、「せぼねをうちきりて、くたくたとなしつ」とあるのは、三九話の虎の鰐に対する描写である、「打ふりて、なえなえとなして」を想起させる。三九話の虎が鰐を殺す描写は、ここでは人が虎を殺す描写へと転換しているのである。

一五六話は、前話である一五五話と話題性や主題、また表現の共通性によって一対をなしているが、さらに、一対で百話余も前に位置した三九話の新羅の虎を想起させつつ、今度はそれに勝る日本人の「兵の道」を効果的に表す仕組みを有することになるのである。この場合、一五五話と一五六話の一対が百余話をも隔てていることは、遠く離れていることにより、三九話の虎の猛威を即座に相殺することなく、しかもその猛威を喚起して、その虎に打ち勝つ人の話に展開する効果的な「間」になっていると思われるのである。

一言付け加えるなら、一五五話と一五六話の共通する主題である、日本の「兵の道」（一五五話）、「兵のかた」（一五六話）が新羅および唐で賞賛され、恐れられたことについて、編者は手放して感心しているわけではない。一五六話の話末に「……とめでけれど、子死にければ、何にかはせむ」との、覚めた眼を見せて、前話にも適用させて、それが絶対的価値ではないことを示していると思われる。二話は新羅と唐という国際的視野から見た一種の日本人観として興味深い話ではある。

三九話は、ここで取り上げた表現にしても『今昔物語集』の同話と共通しており、それが必ずしも『宇治拾遺物語』固有の表現であるとは言えない（ただし「打ふりて」なえなえとなして」は『今昔物語集』には見えない表現である）。一方、一五五話には今のところ先行話も類話もなく、また一五六話は『日本書紀』欽明天皇六年の記事によるその翻

案であるようだが、もとより表現はまったく異なる。それどころか、『日本書紀』の「百濟」が「唐」に変わっているのは、前話の「新羅」を意識した『宇治拾遺物語』の改変ではないかとさえ思われる。それだからということが絶対的根拠になるわけではないが、この二話の表現性の三九話との類似は偶然とは思えない。似たような状況を描くことによる類似性もあろうが、むしろ主格と動詞を転換するなど微妙な作為も看過できず、三九話を想起させること自体に効果を狙った編者の意図を内包した表現であり、語りの仕組みではないかと思うのである。

このような結論に至ったのは、私見のみではない。すでに荒木氏が、九一話と一七〇話を比較対照して、次のように述べている。

同じような「築地高くつきめくらし」た城の中で、同じように展開される悲惨な光景。しかしそのように両者を同定して読めるのも、説話自体がもともと有していた類似性はさることながら、実は『宇治拾遺』の手腕と無縁ではない。話に於いて三回繰り返される「築地」を高くつく、という語句のうち、……いずれも『宇治拾遺』が表現上に微妙な改変の手を加え、統一をはかったと覚しい。……

説話自体の連想と『宇治拾遺』の形成した表現により、読者は、二つの説話を一つの出来事のように、或いは、全くの別話ではない、類話として把握し、両者のイメージを重ね合わせて読むことになる。二つは相隣して並べられているのでは無く物語の中で遠く離れた場所に位置しているから、それはあくまで、遠い思ひ出のように幽かに憶い起こされて、次第に重ね合わされる。その間隔を埋め、喚起力を支持する意味でも、両者の表現は……くどいくらいに同じ言葉で繰り返されねばならなかった。⁽⁵⁾

遠く離れた話同士を想起させる表現の手法に関して、氏の見解は私見とほぼ同様な結論を示していると言えよう。

次に、序文における「薙」と三八話における「薙」に注目してみたい。「薙」は『宇治拾遺物語』において他に一八話、一〇八話、一四五話に見える。しかし、序文と三八話の薙は単なる薙ではなく、それぞれの主人公の奇異なる行動に付随したものであり、他とは意味が異なるものとして注目されるのである。

ところで『宇治拾遺物語』の序文は特異な序文として、まだ決着を見ない問題を抱えている。通常序文は編者が付けるものであるが、『宇治拾遺物語』の場合、その表現のあいまい性ゆえに、序文の筆者は編者とは別人ではないかとする見方も強い。

『宇治拾遺物語』の序文は、まず『宇治大納言物語』の成立事情とその内容を紹介する。次いで『宇治大納言物語』の実体、流伝、増補の事情を説明し、そして『宇治拾遺物語』という本の派生を記す。しかしその肝心な『宇治拾遺物語』の成立に関わる表現は、「大納言の物語に、もれたるを拾ひあつめ、又、厥後の事など、書きあつめたるなるべし」「宇治にのこれるを拾ふとつけたるにや」、「又、侍従を拾遺といへば、侍従、大納言侍るをまなびて（宇治拾遺物がたりといへるにや、差別）知りがたし」「にやおぼつかなし」といった推量や疑問の表現が多く、不確かなものである。それ故に序文の筆者を編者とは別人とする説があり、また一方で、編者自身が韜晦的な表現を用いたとする説があり、いずれとも決着を見ない。

しかし、今、もし序文が説話本文となんらかの意識的関連性を有することが言えるならば、それは序文の筆者は編者その人であるということの一証左となるであろう。そこで遠く離れた話同士が互いに意識させる仕組みが、序文についてとも言えるかどうか考えてみようと思うのである。

序文は最初に多くの筆を『宇治大納言物語』の説明に費やしている。『宇治大納言物語』を語ることが、『宇治拾遺

物語』の性格を語ることになることは、すでに多くの論者の認めるところである。そのことは、とりもなおさず、序文の筆者が『宇治拾遺物語』の性格をよく心得て表現しているということであり、筆者が編者自身である蓋然性につながるものである。さてその『宇治大納言物語』の編者である宇治大納言源隆国について、序文は、

もとどりを結いわけて、（をかしげなる姿にて、）筵を板にしきて、（すずみゐはべりて、）大なる打輪を（もて、あふがせなどして、往来の者、）上中下をいはず、（よびあつめ、）昔物語をせさせて、我は内にそひ臥して、語るにしたがひて、おほきなる双紙に書かれけり。

と記す。その、「をかしげなる姿」については、隆国には例えば『古事談』に記された奇行説話⁽⁶⁾などがあることと相俟って、彼特有の一種の奇行とみてよいように思う。その場合、奇行の有する積極的意義を挙げるなら、既成の価値観、常識とされる通念から自由であることであり、その自由な姿勢、自由な発想の表現が奇行ということになるだろう。隆国の場合、そうした自由な発想が創造力と密接に結びついて、特異な説話の収集方法と説話集という作品の作成をなす原動力になったと解することができるのではないだろうか。

その点については、山岡敬和氏に次のような指摘がある。

既存の儀礼や価値を逸脱した姿であるゆえに、後に続く「上中下をいはず」と、階層的身分にとらわれない説話採録が可能になっているのである。しかも、彼の場合、浄土信仰の中心である平等院にいながら、この笑いを呼ぶ姿を採っているのである。まずそれは、俗的世界からも仏教的世界からも離脱した、両者の境界に隆国は位置を占めているということであり、換言すれば、説話集の質的多様性を反映して、ここに隆国が位置づけられていることによって、「たうとき事もあり、おかしき事もあり」と世俗説話から仏教説話にわたる「さまざま様々なる」内容の説話採録が実質的に可能になっているのである。⁽⁷⁾

さてこの隆国の奇行に付随した、「筵」に「臥す」という行為に、読者は説話本文の中でもう一度遭遇することにな

る。それも、作品中随一とも言える奇行としてである。三七話「鳥羽僧正、与国俊戯事」である。しかもこの奇行の主である鳥羽僧正⁽⁸⁾は、隆国その人の息子という血縁にある。さてその鳥羽僧正には、

さだまりたる事にて、湯舟に藁をこまごまときりて、一はた入て、それがうへに藁を敷きて、ありきまはりては、左右なく湯殿へ行て、はだかに成て、「えさいかさいとりふすま」といひて、湯舟にさくとのけざまに臥す事をぞし給ける。

という奇異な習慣があつた。

この話は、僧正をたずねた甥の国俊が、さんざん待たされた挙げ句に、その間、僧正が自分の牛を使って外出したと知つて腹を立て、僧正のその奇異な習慣に目を付けて、藁の代わりに碁盤を逆さまにして藁で覆い、仕返しをしたというものである。「藁」「臥す」はそれぞれ三回も用いられて印象付けられている。

僧正と国俊の知恵比べの観のあるこの話は、血族に共有の頭の回転の良さ、奇抜な発想、度を超えた行動といった点が印象的ではある。しかし所詮、編者が話末に付した、「このたはぶれ、いとはしたなかりけるにや」との、肉親同士*の*いき過ぎた悪戯という、たわいがないと言えばたわいがない話として楽しんで終わるかに見える。

ところが、次話を読み合わせることによって、僧正の奇行はまた別の意味をもつことになる。それが編者のしたたかな仕組みであることは否めないであろう。

次話は「絵仏師良秀、家ノ焼ヲ見テ悦事」という標題で、絵仏師の良秀が、自分の家が焼け、妻子が火中に残っているにもかかわらず、その燃えるさまを見て、長年うまく描けなかった不動尊の火焰を感得して喜んでいたという話である。これも周囲の人をして「物のつき給へるか」と驚嘆せしめた奇行であるが、その時、読者は、前話の鳥羽僧正こそ名声高い画僧であつたことに気付き、僧正の奇行に、良秀の奇行と底通する何かがあることを感じ取るようになるはずである。

三七話では鳥羽僧正が画僧であることは微塵も触れられない。しかし、次話がそれを想起させることは隠された——知る人には自明の事実であるが——文脈である。鳥羽僧正覺猷は絵に優れていた。『尊卑分脈』には「画図長」と記され、『長秋記』保延元年六月三十一日条に、鳥羽殿屏絵の筆者の候補に上がったことが記されている。また『古今著聞集』画図第十六には「ちかき世にはならびなき絵書なり」と紹介されて、絵画に関する説話が二話載る。現在彼の作品の転写や、模写とされるものが残されており、彼が絵巻の傑作「鳥獣人物戯画」の作者とされていることは周知のことである。

そればかりではない。「其後にや、良秀がよぢり不動とて、今に人々めであへり」という傑作を残したという良秀の話との関わりでいうなら、鳥羽僧正がことに不動明王の絵を描いて知られたことも想起されなくてはならないであろう。今日唯一彼の絵として確実な作品は、「鳥羽僧正御房之写タル也」との極め書きがある醍醐寺蔵の「不動明王図」である。これは鎌倉時代の転写であるが、威勢ある火焰の描写に優れ、僧正の筆致をよく伝えていると言われる。また禿氏祐祥氏が発見紹介した『溪嵐拾葉集』の一本⁽⁹⁾には、僧正が「異形不動百餘尊」も描いたことが記されている。その不動尊は「不思議形像」であり、持物の剣で尻をぬぐったり、女形をしていたり、剣をかざして脇侍である二童子を追い回したりしているものであるという。その異形について同書では深淵な仏教的解釈をしているが、鳥羽僧正ならではのひょうきんな風刺画と思われる。

さて、画僧であること、のみならず不動明王の絵をよくしたことなど、良秀と鳥羽僧正の類縁性によって、両者の奇行には芸術家としての魂——そう言って大げさであるならば、非凡な芸術家なればこそ常識や通念を超えた発想の持ち主であることに、思いを致すことになると思うのである。

序文の隆国の奇行が、説話集という作品の創造者としての奇行であったことは、三七話と三八話の一对をなす画僧の奇行と通じるものであり、それが三七話の「薙」に「臥す」によって想起され、創造的行為者のありようを互いに

喚起し合う関係にあると言えよう。のみならず、鳥羽僧正は隆国の子息である（もともと国俊も事實は隆国の子で僧正の兄弟である。なぜ国俊がここで僧正の甥という、事實に反する伝承になっているのかは不明である。ともあれ、国俊にもこの一族としての血縁の類似性は感じとることになる）。父と子に、あるいはこの血族に、特有の共通する性格、発想、人間性、そしてそれ故の創造力を想起することになるであろう。

以上、序文と三七話においては、端的には奇行に付随した「薙」に「臥す」という共通表現によって、父と子という血縁にあるもの同士の、そして説話集作者と画家という芸術家的要素とその類縁性が、編者によって、読者に想起されるように仕組まれていると見たいと思う。それを認め得るならば、序文の筆者は編者その人であるということになるのである。

四

前節で、序文もまた説話本文との関連性を意図されているのではないかと、特異な共通表現を手がかりに探ってみた。しかし、はたしてその手法が、『宇治拾遺物語』において自覚的なものであると言えるのか、前節の読みだけでは不足であろうから、さらに血縁とその類縁性を想起させる話同士を説話本文においても見てみようと思う。

そこで、第一話の和泉式部と、三五話の小式部内侍の話に注目してみよう。言うまでもなく和泉式部と小式部内侍は母と娘である。

第一話は、

今は昔、道命阿闍梨とて、傳殿の子に色にふけりたる僧ありけり。和泉式部に通けり。経を目出く読けり。それが和泉式部がりゆきて、臥したりけるに、

と始まる。一方、三五話は、

今は昔、小式部内侍に、定頼中納言、物いひわたりけり。それに又、時の関白かよひ給けり。局に入て、臥したりけるを

と始まる。一話は道命が和泉式部と同衾したあとで、不浄のまま経を読み、その読誦を愛でて五条の齋が出現した話であり、三五話は定頼が小式部のもとへやって来て、関白と同衾中と知って帰る時、経を声高く読み上げ、それを聞いた小式部が関白に背を向けてしまうという話である。母と娘はともに男と「臥す」女として、はなばなしい恋愛遍歴で知られる両者の類縁性をまず想起させるであろう。さらには経の読誦が関わることの共通性が両話を緊密に関連付けていることは否めないであろう。とすれば、ここには互いを想起させる編者の意図が働いていると見てよいだろう。

それについては、両話に存在する同話に注目することによっても『宇治拾遺物語』の意図に関わる示唆が得られると思われる。両話とも同話が『古事談』に載る。一話は『古事談』巻三に載り、道命と和泉式部の下りは、

通和泉式部之時、或夜往式部ノ許會合之後、

とある。一方、三五話の同話は、『古事談』巻二「頼宗・定頼ト好色ノ女房ノ事」という題で、

上東門院有好色女房。(或説小式部内侍云々)。堀河右府與四条中納言共愛此女然間或時右府先入件女房局、己以懷抱。其後納言(于時頭弁云々)同伴局之處己知會合之由、

とある。三五話の同話は『古事談』では女が小式部であることは「或説」として紹介しているにすぎないが、『宇治拾遺物語』では「小式部内侍」が主人公になっている。そして、『古事談』が「會合」「懷抱」と漢語で表現した部分が、『宇治拾遺物語』では一話、三五話とも「臥す」という和語で共通している。つまり、『宇治拾遺物語』が独自に『古事談』を脚色したとは、説話の伝承関係の困難な問題性ゆえに即座には言えないのであるが、少なくとも『宇治拾遺物語』においては、三五話の主人公は「小式部内侍」でなくてはならなかったわけである。⁽¹⁰⁾『宇治拾遺物語』において

は、「臥す」という共通語、そして「経」の介入する話であるという共通性によっても、第一話の和泉式部を想起させ、母と娘の物語として両話が読まれることになるであろう。つまりそれは編者が意図した文脈だったと言えると思うのである。

ところで「経」——『法華経』の介入については、単に話に経が関わりをもつといったレベルではなく、『法華経』が本質的には、見えない部分を喚起しつつ両話の背後に存在することの意味が、より重要であろうと思われる。一話では道命がその読誦の名手であったことは話の骨子をなすものであるが、和泉式部自体と経との直接的関わりは記されていない。しかし、和泉式部には有名な法華経を読み込んだ歌がある。『拾遺和歌集』巻二十の、

性空上人のもとにのみて遣はしける

くらきより暗き道にぞ入りぬべきはるかに照らせ山の端の月

この「くらきより暗き道に入り」は『法華経』「化城喻品」の「從冥入於冥」を踏まえた語句で、この歌は『俊頼髓脳』やそれを引用した『無名抄』に、「式部が歌をば、はるかに照らせ山の端の月と申すをこそ、よき歌とは、世の人申すめれ」とあり、世に知られた代表歌であったことが分かる。このように、話としては触れられない式部自身の側に、『法華経』の話を引き寄せる要素があるのである。

和泉式部の人生観から、あえて言えば、愛欲の罪苦に身を置く女として、式部の心を捉えていたのが、滅罪生善の経としての『法華経』であった。和泉式部は書写山の性空上人に、己の救済を求めてこの歌を送ったのである。一方小式部内侍の場合、三五話において、定頼の読む経（『古事談』では『法華経』の「方便品」と明示されている）に強い反応を示している。二人の男に同時に愛された小式部内侍にも、己の罪を思うことがあったと解される。一話の和泉式部と『法華経』、という見えない部分は、一話と三五話とが互いに想起し合うことで、愛欲の罪に苦悩する母と娘の類縁性として認識されることになるのである。

以上、話の背後にも読者の知識や認識を喚起しつつ二話を互いに想起させ、その読みの広がりを作組んでいることが『宇治拾遺物語』の本文で確認できたと思う。ことにこの冒頭話である第一話と三五話とが喚起し合つて、母と娘の物語としての読みを開示していることは、丁度同じ程度の話数を隔てて、冒頭話の前に位置する序文と、三七話とを父と息子の物語として読む可能性を暗示すると言えなくもないだろう。さらに付け加えれば、「臥す」母と娘、「臥す」父と息子という一対でもある。こうした符合は偶然の所産とは思えないのである。

五

ここでもう一つ、父と息子の話のありようを、二七話「季通、欲逢事事」と一三二話「則光盗人ヲ切事」の話で検討してみよう。季通は息子、則光はその父という関係である。

両話は女の元に通つた、また、通おうとした男が、襲撃を受け、その危機を脱するという主題で一致する。二七話では季通は、自身の力というより、召し使う童の機転によって脱するのであるが、季通は「此駿河前司は、いみじう、力ぞ強かりける」と記される。一方一三二話は則光が自身で襲う者を切り殺す話であり、則光は「力などぞいみじう強かりける」と紹介される。両話の主題や、両者の紹介に関わる表現の一致によって、二話は遠く離れているにも関わらず、その類縁性が想起させられ、かつそれが子と父の話という関係にあることに思いを馳せることになる。

実はここでは、彼等が父と子であることを、編者は読者の認識に待つのではなく、編者自らが両話の冒頭で喚起している。先に読まれることになる二七話には、「昔、駿河前司橘季通といふ物ありき」と紹介されるが、一三二話の冒頭は、「今は昔、駿河前司橘季通が父に、陸奥前司則光と云人ありけり」というものである。すでに読んでいる二七話の季通の紹介を受けて一三二話の則光を紹介し、両話が子と父の物語であることを、ほかならない編者自身が明示しているのである。

この二話には同文同話が存在し、父則光、子季通の順で『今昔物語集』巻二三第一五、第一六に隣り合って、その「二話一類」の編纂形態によって配列されている。『今昔物語集』では、これらの前に位置する二つの説話が、「兵」である平致頼、致経という父と子の武勇譚、続いてこの、「兵ノ家ニ非ネドモ」である橘則光、季通の「思量賢ク、身ノ力ナドゾ極メテ強カリケル」（両者とも同じ表現で記述される）話となっている。さらに『今昔物語集』では、第一五話の冒頭に「今昔、陸奥前司橘則光ト云人有ケリ」、話末に「只今有ル駿河前司季通ト云人ノ父也」とあり、一方、第一六話の冒頭に「今昔駿河前司橘季通ト云人有キ」、話末に「此ノ季通ハ陸奥前司則光朝臣ノ子也」と、くどいほど二人の父子関係を強調する。

つまり、『今昔物語集』においては、則光と季通の話は、父と子の話であることも、主題が並外れた彼らの武勇にあることも、一目瞭然であり、それが話の主眼なのである。

では、なぜ『宇治拾遺物語』においては、両者は遠く離れて位置し、しかも、『今昔物語集』が語った類縁性をあえて想起させるような記述をとるのだろうか。一つここで確かなことは、『宇治拾遺物語』は遠く配置しても、父と子の話であること、およびその類縁性を、意図的に読者に喚起しようとする姿勢をもっているということである。このことは、すでに見た一話と三五話の母と娘、そして序文と三七話の父と子という喚起性を認める意味でも示唆的であろう。

さて、『宇治拾遺物語』が両話を離れて位置させたことにはそれなりの理由がありそうである。それぞれの話が、それぞれの位置で読まれることの意味があらたに付与されるのである。それが『宇治拾遺物語』の説話の扱い、複層的に話を握み直して読む、読ませる、方法であるようだ。

まず、二七話がその位置された前後の配列においていかなる読みを開いているか見よう。二七話と前話である二六話は、小出素子氏によって「聡明な人物により災いを逃れる」、との関連性が指摘されている⁽¹¹⁾。氏の言うように、二六

話の主人公は優れた陰陽師安倍晴明の眼力によって、二七話の季通は賢い童の機転によって危機を脱する。しかしさらには、そうしたストーリー性の連関に加えて、その危機脱出の時が両者「暁」という時刻で結ばれ、また表現の上では、二六話の「暁がたに、戸をはたはたとたたきける」と、二七話の「暁に、この童の来て、……門たたきなどして」とが、暁に訪づれる者が「戸」「門」を「たたく」という共通語として両話を結んでいるのである。

次話である二八話との関連については、小出氏が「危害を加えようとしたが失敗」と括るように、今度は季通の側からでなく、季通を襲った侍たちが、襲いきれなかったことを受けて、二八話の盜族袴垂が保昌を襲って襲いきれなかったことに連動する。加えてこちらも、二七話の表現が二八話に組み込まれていく仕組みをとる。すなわち二七話の「しや頭をとりて、うちふせて、きぬをはぎ侍りつれば」は、二八話の「衣すこしまうけん」「走かかりて、衣をはがんとおもふに」に連動して、「衣をはぐ」話としての関連性を繰り出すのである。

さらに二七話は二八話を越えて二九話とも、女と臥している男が、そのことによって襲われる話、ということに連動している。

次に一三二話の、配列上における読みを見よう。まず前話一三一話との関連は何か。小出氏は、「与えられた幸福。奪われた厄災」とする。しかし、これは少々当を得ない。もう少し細かく共通部分を含めてまとめると、一三一話が「三度恵みを押し返す話」であるのに対し、一三二話は「三度危害を押し返す話」ということになるだろう。

一三一話は、貧しい女が清水の観音に祈願し、観音から御帳の帷を賜るが、神の物ゆえ本意とせず押し返す。それが三度繰り返され、遂に納めて、結果、幸運を得るというもの。一方一三二話の則光の話は、夜道で何者かに襲われ、一人目を切り伏せ、次に襲うものを切り伏せ、三人目をも切り伏せてその難を逃れる。つまり三度襲う危害を切り抜ける話である。前話に「三たび返し奉るに」、後話に「三人ありければ」、「大なる男三人」、「物の三人」とあり、「三」が繰り返されて、両話を連関させるキーワードとなっている。

また一三二話の女が観音の前に「うつぶしに臥したりける」とあるに對し、一三三話では切り伏せられる男を「うつぶしに走りまろびぬ」、「うつぶしに倒れたりけるを」と描写して、ここでも前話の表現が次話に繰り込まれている。

一三二話と次の一三三話はどうか。小出氏は「危うく死を逃れる」とする。この解釈は、一三三話の主人公の僧が水から引き上げられて危うく死を逃れた点を、則光が危害を逃れたことと対応させて見たのであろう。確かにそう読めないわけではないが、それは副次的な対応であり、もっと緊密な関連性で括るなら、「嘘をつく話」ということになる。一三三話は標題に「空入水シタル僧事」とあるように、主人公の僧が、もともと入水する気などないのに、入水すると吹聴して人々を騙そうとした話である。これに対応するのは、一三二話では、則光の行為や言動ではない。襲った三人を切り伏せた事を則光はひた隠しにしていたが、翌日事件が発覚した折、そこには自分の仕業だと得意げに人々に向かってまくしたてる男がいた、その嘘つき男の登場が次話の嘘つき僧の話に展開するのである。つまり、一三二話を則光の話として読むことから、別の読みへと角度を変えて読むことになるのである。

このように、二七話と一三三話は、それぞれの配列の文脈において、それなりの読みを担った話として『宇治拾遺物語』という作品に組み込まれているのである。それでいて、二話を一類とした『今昔物語集』のごとき、両話の有する父と子の関係や類縁性は無視されたのではなく、逆に遠く離れて想起させられ、そのことによって、作品の中に父と子の物語という貫通する世界を内在させているのである。こうした説話の文脈の構築こそ、『宇治拾遺物語』という作品そのものの表現方法であると言えるよう。

おわりに

以上、数話を扱ったのみであるが、『宇治拾遺物語』には、連続する説話間の関連性に加えて、離れた説話同士の間にも関連性を想起させる「文脈」が存在することを確認した。この文脈の機能によって『宇治拾遺物語』は、眼前の

読みと、遠く離れた説話の想起させる読みとが綾をなして、それぞれの説話の内包する多面的要素を刺激し、事物や出来事を効果的に読むこと、角度を変えて読むこと、一見無縁な話同士を連動するものとして読むこと、あるいは表面に直接現れない意味を読むことなど、さまざまな読みの可能性を開示しているのである。

「文脈」は、事物や主題のレベルから、それと密接な機能としての言語表現のレベルに及び、それぞれの話を『宇治拾遺物語』という作品の中に定位させ、かつダイナミックに連動させて活かす仕組みとなるものである。こうした文脈こそ、編者の編み出したものであり、『宇治拾遺物語』の編纂方法であると言えるだろう。

さて、このような文脈の読みにおいて、序文の隆国説話もまた、説話本文と有機的に結びつくことを見た。すなわち、父と子、もしくは母と子の物語を想起させる意識が編者にはあること、想起させるための表現を布石していること、そして何よりも、父と子の血縁と類縁性を編者が認める姿勢をもっていることなどを確認したと思う。序文の隆国説話と三七話の連動性を認めることができるならば、序文の筆者は編者その人であることの一証左になる。とすれば、序文のあいまいな表現性は編者の韜晦的表現なのであり、すでに作品の「読み」は序文から始まっていた——ということになるのである。

注

* 『宇治拾遺物語』本文は新日本古典文学大系による。

- (1) 増田勝実「中世風刺家のおもかげ——『宇治拾遺物語』の作者——」『文学』昭和四一、一二。三木紀人「背後の貴種たち——宇治拾遺物語第一〇話とその前後——」『成蹊国文』昭和四九、一二。小出素子「『宇治拾遺物語』の説話配列について——全巻にわたる連関表示の試み——」『平安文学研究』昭和五七、六。佐藤晃「『宇治拾遺物語』の説話配列における表現方法」『日本文芸論叢』昭和五九、三。同「『宇治拾遺物語』の表現機構」『中世文学』昭和六二、二。森正人「宇治拾遺物語の言語遊戯」『文学』平成一、八。

- (2) 「異国へ渡る人びと——宇治拾遺物語論序説——」『国語国文』昭和六一、一。「宇治拾遺物語の時間」『中世文学』昭和六三、六。「次第不同」の物語——宇治拾遺物語の世界——」『説話論集』第一集、清文堂、平成三。
- (3) 前注(2)「宇治拾遺物語の時間」
- (4) 「宇治拾遺物語」の世界——聖なる世界と俗なる世界と——」『飯山論叢』平成六、一
- (5) 前注(2)「異国へ渡る人びと——宇治拾遺物語論序説——」
- (6) 卷一——五四に、天皇の装束に奉仕し、毎度その玉茎を採った話、卷二——六三に、ごく小さな馬に乗って「足駄」だとうそぶき、下馬せずに宇治殿に出入りした話がある。
- (7) 「『宇治拾遺物語』序文考——宇治をめぐる夢想——」『国学院雑誌』昭和六三、一〇
- (8) 鳥羽僧正が奇抜な発想をする人物であったことは他の説話でも知られる。『古事談』卷三——七三の、遺言状に「処分は腕力によるべし」としたためた話、『古今著聞集』画図第十六の、俵が辻風に吹き上げられている絵を描いて供米の不法を訴えた話、及び画法を巡る弟子とのいさかいの話、『溪嵐拾葉集』一本の、異形の不動尊を描いた話など。
- (9) 「鳥羽僧正覚猷の戯画に関する一史料」『国華』昭和七、一一
- (10) 『古事談』の「堀河右府宗頼」が『宇治拾遺物語』では「時の関白教通」になっていることについては、荒木浩氏(前注(2)「宇治拾遺物語の時間」)に、小式部と教通の話である八一話との関連文脈としての意味が指摘されている。
- (11) 前注(1)における小出氏論文。以下小出氏の引用はこれによる。